名古屋電気学園
クラブ活動だより

愛知工業大学
愛知工業大学名電高等学校
愛知工業大学名電中学校
愛知工業大学情報電子専門学校

令和５年秋季版
（令和５年11月15日）

平成に続き「令和の３連覇」！

高校野球部が３年連続15回目の夏の甲子園に出場

愛工大名電高校野球部が、第105回全国高校野球選手権記念大会愛知大会で優勝し、３年連続15回目となる夏の甲子園出場を果たしました。これは、同部が第８７～８９回大会（2005～2007年）にかけて成し遂げた「平成の３連覇」に続く、「令和の３連覇」の快挙です。どこにも負けない練習量と、科学的なトレーニング、そこから生まれた自信。守備からリズムをつくり、粘り強く闘い抜いたチームが、愛知の高校球史に新たなページを書き込みました。

■愛知大会　173チームの頂点に立つ

愛知大会決勝（７月２９日・岡崎レッドダイアモンドスタジアム）で勝利し、３年連続の甲子園出場を決めました。

優勝候補として他校に厳しくマークされながら迎えた初戦、大府との接戦を終盤の逆転劇により５－４で制しました。２戦目には名城大附属を３－０で下し、３戦目は愛知に１０－０のコールド勝ち。さらに準々決勝では大会屈指の投手を擁する享栄を１０－０のコールドで下しました。

準決勝では中部大春日丘に先制されたものの、すぐにリードを奪い返し、８－５で勝利。そして決勝戦では、全国最多優勝を誇る中京大中京を相手に１点をめぐる息詰まるような接戦の末、４－３で守り勝って最激戦区愛知の頂点に立ちました。

愛知大会の参加校は、全国最多の173チーム。その頂点に立つことの大変さは言うまでもありません。２連覇から３連覇、より困難な目標に今年のチームは挑戦し、見事に優勝旗を持ち帰ってくれました。

■甲子園初戦 一丸となって戦い抜いた

試合後、ナインをたたえる愛工大名電の応援団（８月８日付の中日新聞県内版から）※中日新聞社の許可を得て転載

昨夏の８強超えを目指した本校は、夏の甲子園一回戦（８月７日）で、古豪・徳島商（徳島）と対戦しました。両校エースによる互いに譲らない投げ合いの末、あと一歩及ばず１－２で惜敗しました。

一回表、早くも訪れた１死２塁のピンチをライト寺田純平（３年）の好捕で救い、その裏の２死一、三塁から加藤蒼惟（３年）の適時打で先制。吹奏楽部による得点時の応援曲「さくらさくら」が鳴り響きました。

三回に逆転を許したものの、以降は先発の笹尾日々喜（３年）が八回途中まで丁寧に打たせて取り、無失点に抑えました。しかし打線は最後まで２点目を奪えず､初戦で聖地を後にすることになりました。

今大会はコロナ下の制限がなくなり、４年ぶりに声出し応援が復活。生徒、保護者や野球部、吹奏楽部、チアリーディング部らの応援団は、逆転を信じて声の限りの声援を送りました。試合後、金森洸喜主将（３年）が「目立った選手はいない分、一つになって戦えた」と振り返ったとおり、一丸となって戦い抜いたチームに、スタンドから温かな拍手が降り注ぎました。

VOICE

倉野光生監督

大会二日目、第四試合。炎天下の猛暑が和らぎ、ギラギラの太陽と異なるカクテル光線に照らされ甲子園球場に立つ名電ナインは誇らしかった。甲子園出場の前に立ちはだかった『夏の愛知、令和の３連覇』という大きな壁。みごとに乗り越え聖地に立った。道のりは、本当に険しかった。甲子園のスタンド、観客席は、平日の第四試合で空きも感じられたが、一塁側の MEIDEN アルプスは見事に満席。愛知から、全国から駆け付けてくれた名電応援団と名電ファンで埋め尽くされていた。

試合は初回に先制して優勢に始めたが、徳商の好投手に阻まれ追加点を奪うことができなかった。ゲームセットのサイレンが響き１対２。聖地の舞台は無情に勝負の厳しさを名電ナインに突き出してきた。勝利を信じてプレーした選手たちは、まるで夢が覚めたような瞬間だった。しかし、ノーエラー、粘り、全力プレー。思う存分に夢の甲子園ですべてを出し切ることができた。勝負は表裏一体だ。勝利は、次なるチームに、後輩に最強 MEIDEN を託すんだ。三年生の先輩から後輩へのメッセージだ。昨年のベスト８を上回ろうと戦ったナインだが、皆様の期待に応えることができずに無念でした。しかし、愛知大会を通じて MEIDEN は貴重な経験を積み、一回り大きく成長した。また何かをやってくれそうにパワーアップしたようだ。

チーム、選手、応援、全校生徒、教職員、ＯＢ、父母会すべてが一枚岩となった甲子園出場でした。皆様の熱い応援ありがとうございました。心より厚く御礼申し上げます。

金森洸喜主将　３年

愛知の夏を３連覇という目標をかかげて臨んだ大会でした。決勝で勝利して目標を達成できた瞬間は感無量でした。愛知大会、甲子園を通じて暑い中を大勢の方々に応援していただいて、自分たちの大きな力になりました。名電自慢のブラスバンドの演奏とサンダースの応援、そして友たちの声援と一体となってプレーすることができました。甲子園で勝利できなかったのは残念ですが、大観衆に包まれて野球ができたことは、本当に楽しかったし、素晴らしい経験になりました。応援ありがとうございました。

卓球インカレで２度目のアベック優勝飾る！

卓球インカレ「第９２回全日本大学総合卓球選手権大会団体の部」（７月１３～１６日・横浜武道館）で、大学男子卓球部と女子卓球部がそろって優勝しました。本学による男女アベック優勝は４年ぶり２回目となる快挙です。

男子は、２年ぶり９回目の優勝を飾りました。出場メンバーは、横谷晟（３年）篠塚大登（２年）谷垣佑真（２年）鈴木颯（１年）。ジュニア時代から同じ名電卓球部で切磋琢磨してきた仲間です。

決勝の相手は、昨年と同じ明治大。「昨年は準優勝に終わり大変悔しい思いをしたので、必ず優勝旗を取り返すぞという強い気持ちで大会に臨みました」（森本耕平監督）。

両校エース対決となった１番、篠塚が宇田幸矢選手とのフルゲームの戦いを制してチームに勢いを呼び込みました。２番は、鈴木が今大会好調な宮川昌大選手を果敢に攻め、ストレート勝ち。３番ダブルスは、篠塚／谷垣が宇田／松田歩真選手にゲームカウント１－２とリードされるも、同学年ならではの息の合ったプレーで逆転勝ちを収めました。

ライバルに全勝でリベンジを果たした選手たちは、閉会式後、中村光人主将（４年）を胴上げして力いっぱい喜びを表しました。

女子は、４年ぶり５回目となる優勝です。「最初から優勝を狙い、優勝するために選手たちは話し合い、考えて準備をしてきました」と、鬼頭明総監督。谷渡亜美（４年）岡田琴菜（３年）永野萌衣（２年）面田采巳（１年）の各選手が出場しました。

神戸松蔭女子学院大と対戦した決勝戦は、１番の永野が最終ゲーム５－１０から粘り強さを発揮して逆転勝利。２番の岡田も力強いプレーで完勝しました。３番ダブルスを落とした後、４番ルーキーの面田がガッツあふれるプレーで優勝を決めました。「ベンチに入れなかった選手たちも自分たちの役割を果たし、全員が優勝に貢献してくれた」（鬼頭総監督）と、ONE TEAM として戦い成し遂げた優勝でした。

苦しい試合がいくつもあった中、皆様の応援のおかげで乗り越えられたと監督・部員たちは感謝を述べ、「男子はパリオリンピック、世界選手権の日本代表を目指して練習に励んでいきます」（森本監督）「女子の次の目標は、まだ成し遂げたことがないインカレ２連覇です。必ず達成できると信じ頑張っていきます」（鬼頭総監督）と、今後の活躍を力強く誓っています。

※写真提供・卓球レポート

日本高校ダンス部選手権スモールクラス初優勝！

演技中のスモールクラス（産経新聞社提供）

高校ダンス部が、第16回日本高校ダンス部選手権夏の公式全国大会（8月16～17日・パシフィコ横浜）のスモールクラス（2～12人）で優勝し、文部科学大臣賞・(社)ストリートダンス協会賞を受賞しました。また、ビッグクラス（13～40人）でも東海地区勢としてトップの14位の成績を収めました。夏の公式大会での全国優勝は東海地区初の快挙です。

スモールクラスは台風の影響により、予定より6時間遅れて会場入り。途中の浜松駅で5時間の停車を余儀なくされました。一時的に扉が開きホームに出ることができたため、少しでも体が固まらないようにホームで体を動かすなどをして運転再開を待ちました。ビッグクラスは名古屋駅で新幹線に乗ることすらできず、急遽バスで移動。通行止めの高速道路を避けながら出演日前日の夜までに横浜へ到着することができました。当日は本校を含む東海・関西勢の12校が出演時間に間に合わず、大会事務局に出演順の変更や休憩時間の延長などの対応をしていただき、全体の予定を1時間遅らせて出場することができました。

「踊る人も、見る人も楽しめるダンスを目指して」をスローガンとする本校ダンス部は、大会シーズン以外は週2日の活動であるため、普段から「短い時間で集中した練習」をしています。本番の舞台でも、その成果を生かして力強いダンスを披露しました。顧問の清水隆博教諭は「今回の列車遅延で会場到着後すぐの演技になりましたが、気持ちを切り替えて普段のように集中力を最大限に高めた状態でパフォーマンスできたことが功を奏したのだと思います」と話しています。

学園表彰（11月2日）

高校メカニカルアーツ部がWRO世界大会へ

（右から）猪俣健悟、楠本大翔、堀田壮真、顧問の大澤和貴教諭

８月２７日に東京都港区で開催された「ＷＲＯ 2023 Japan 決勝大会」で、高校メカニカルアーツ部の「meiden一年」チームが優勝しました。１１月７～９日にパナマ共和国で開催される世界大会に日本代表として出場します。

子供たちを対象にしたロボットコンテストであるWRO（World Robot Olympiad）は、市販のキットを使ってロボットを製作し、プログラミングによる自動制御技術を競います。2004年に第1回が催され、世界的な広まりをみせています。毎年、世界で起きている問題に合わせたテーマが設定され、それに沿った競技が行われるのも特長です。

「meiden一年」は、堀田壮真（専門学科1年）、猪俣健悟（同）、楠本大翔（普通科1年）の3人のチームで、自律型ロボットの走行競技であるレギュラーカテゴリーのエキスパート競技シニア部門に出場しました。同部門はプレゼンシートでの発表も加わります。競技は2走を行い、毎年違う内容となる1走目は、指定された色のコンテナブロックを船の上に置き、指定の場所まで移動させるものでした。２走目は、その場で与えられた課題を２時間で考え、取り組みました。

両走行で満点を取り、1走目の走行タイムも東海地区優勝時よりかなり縮めて優勝を果たした3人は、「4月から地道な調整を重ね、成果を出すことができて本当にうれしかった。全国大会では一度は負けが頭をよぎりましたが、最後の最後まで諦めずに調整しきったおかげで勝利をつかめました。『諦めない』を胸に、世界大会でも1位を取れるように頑張ります」と意気込みます。

部顧問の大澤和貴教諭は「前向きでやる気に満ちあふれた生徒たちです。ただがむしゃらに回数を重ねて練習するのでなく、一つ一つの動きを細かく修正し、緻密にロボットを作り上げていました。チームの中で1人が飛び抜けて優れているわけでなく、しっかりと3人で相談してロボットを作り上げていくチームワークも素晴らしいものがありました」と頑張りをたたえています。

学園表彰（11月2日）

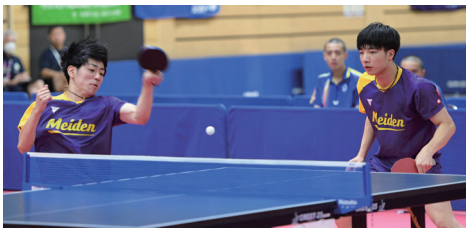
インターハイ卓球　学校対抗７連覇！

学校対抗７連覇を達成した高校卓球部

ダブルス優勝、シングルス準優勝

高校卓球部が、今夏の第 92 回全国高等学校卓球選手権大会（インターハイ）で７大会連続２１回目の優勝を飾りました。個人種目もダブルスで優勝、シングルスで準優勝しました。

大会は８月８～１３日、札幌市の北ガスアリーナ札幌 46(札幌市中央体育館)で開催されました。学校対抗準決勝で出雲北陵（島根）に競り勝った本校は、決勝で明豊（大分）と対戦。１番の坂井雄飛（２年）が明豊エースを相手にフルゲームの逆転勝利を収めました。２番は１年生の面田知己が思い切りよく３－１で勝利、優勝に王手をかけました。



ダブルス優勝の中村煌和（左）・萩原啓至（写真はいずれもニッタクニュース提供）

３番ダブルスは、前日に行われた個人戦のダブルス決勝と同じ顔合わせになりました。中村煌和 / 萩原啓至の３年生ペアは第１ゲームからペースをつかみ、主導権を手放さず３－０で完勝。ストレートで名電の７連覇を達成しました。

個人戦では、ダブルスの中村 / 萩原ペアが名電として３年連続となるタイトルを勝ち取りました。シングルスでは、荻原が高校３冠にあと一歩と迫り準優勝。坂井が３位、中村がベスト８という結果になりました。

■今枝一郎監督の話　もちろん優勝を狙いましたが、３月の全国選抜で負けてからプレッシャーが良い意味でなくなり、新たな気持ちで大会に挑むことができました。７連覇がかかっているといっても、今の生徒たちがいる前からのことです。生徒たちには今の一瞬を大切にしてほしいと話しました。準決勝では追い詰められる場面がありましたが、そこでこそ冷静な戦いをしてくれました。決勝では未来につながるべく１、２年生のチャレンジも行い、その中で出場する選手が最善を尽くして勝利をもぎ取ってくれました。いい選手たちと共に戦い、結果も残せました。最高の夏でした。遠方にも関わらず、理事長先生、校長先生も会場に足を運んでくださり、本当に力になりました。ありがとうございました。

中学は王座を奪還！　全中で２年ぶり 14 回目の優勝

王座を奪還し２年ぶり 14 回目の優勝を飾った中学卓球部

第54回全国中学校卓球大会は８月２２～２５日、高知県立県民体育館で開催され、中学卓球部が昨年逃した王座を奪還して２年ぶり 14 回目となる優勝を飾りました。

準決勝で昨年２位の中間東（福岡）を３－２で下した本校は、決勝でライバル校の野田学園（山口）と対戦しました。１番を落とし、２番の持田陽向（３年）が３－１で勝利、１対１で３番ダブルスを迎えました。月原弘暉 (2 年) / 浅里巧真 (1 年) ペアはフルゲームの熱戦を制して優勝に王手。大接戦となった４番で競り負けたものの、ラストは郡司景斗 (2 年) が落ち着いたプレーでストレート勝ちし、王座を取り戻しました。

個人戦のシングルスでも、佐々木雄大（３年）が準優勝、持田と郡司がベスト８という結果になりました。

■真田浩二監督の話　メンタルトレーニングを受け、今の自分を受け入れた選手たち。一人、二人と顔つきを変え、頑張る選手が増えていきました。予選会のベンチコーチから教わった点の取り方や勝ち方は、力をくれました。懸命に練習の相手をし、指導してくれた先輩たちのお陰で、戦う技が増え、自信につながりました。いただいたお守りに“叶えごと”を書き、「きっと上手くいく」と合言葉ももらいました。全ての物事が、優勝へとつながっていくシナリオのように思えました。決して自分たちの力だけでは成し遂げることは出来なかったと、感謝の気持ちをあらためて実感する夏になりました。

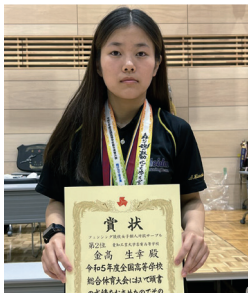
高校フェンシング部がインターハイ 13 年ぶり 11 回目の優勝

13 年ぶり 11 回目の優勝を果たした高校フェンシング部

高校フェンシング部が、８月２～６日に北海道室蘭市で開催された令和５年度全国高等学校総合体育大会（インターハイ）男子学校対抗戦で 13 年ぶり 11 回目の優勝を果たし、同部が持つインターハイ最多優勝の記録を更新しました。

個人戦で、昨年女子サーブル準優勝だった金髙生幸（２年）が決勝戦で敗れ準優勝､男子フルーレ３位だった林川琉偉（２年）もベスト 16 に終わるなど、目標としていた優勝に届かず、いやな雰囲気を感じながら最終日の学校対抗戦に挑むこととなりました。

学校対抗戦は、総当たり戦９試合を行い、先に５勝をした方が勝利となります。メンバーは３年生でキャプテンの杉浦敬祐、２年生の長谷川力玖と林川、１年生の西村健也の４人で戦いました。



女子サーブル準優勝の金髙生幸

１回戦シードで２回戦からのスタートになった対戦相手は、U17 日本代表が所属する開新高校(熊本県)。本校は長谷川が捻挫をするアクシデントがありましたが、５勝２敗で３回戦に進出しました。長谷川に代えて西村を出した３回戦の高松北(香川県)戦では､個人ベスト８の相手を西村が倒し５勝０敗と勢いに乗りました。準々決勝では全国選抜３位の清風（大阪府）に５勝０敗、準決勝も全国選抜３位の気仙沼（宮城県）に５勝１敗と、危なげなく決勝へ進出しました。

決勝の相手は、日本代表選手を２人擁する鹿児島南（鹿児島県)。３月に行われた全国選抜では準々決勝でギリギリまで追い詰めながら惜敗した相手である全国選抜チャンピオンとの対戦となりました。準決勝まで勢いに乗っていた西村が日本代表の２選手に敗れるなど、一進一退の展開は４勝４敗の最終戦にもつれ込みました。西村から、捻挫をした長谷川に交代をした最終戦、覚悟を見せた長谷川が５点対３点で勝利し優勝を決めました。

冨田弘樹監督は「歴代の先輩方がつないできた意思を引き継ぎ、13 年ぶりにインターハイの団体戦で優勝することができ、うれしく思います。覚悟を持って戦ってくれた選手たちを本当に誇らしく思います」と話しています。

FISU ワールドユニバーシティゲームズ卓球競技で団体銅メダル、ダブルス銀メダル

前回を上回るメダルを獲得した日本男女

国際大学スポーツ連盟（FISU）が主催する学生の国際総合競技大会「FISU ワールドユニバーシティゲームズ 2023 中国成都」の卓球競技（7 月 29 日～８月５日）で、学園と学園出身の選手を主体とする日本男子チームが、団体銅メダル、ダブルス銀メダルなどの成績を上げました。卓球競技男女全体では合わせて６個のメダル（銀３、銅３）獲得となり、前回大会を上回りました。

学園関係の出場選手は、横谷晟（大学３年)、谷垣佑真（大学２年)、田中佑汰（大学 OB）と名電中高出身の濵田一輝（現・早稲田大学）の４選手です。大学男子卓球部の森本耕平監督も日本チーム男子監督として帯同しました。

男子団体準々決勝で香港チームをストレートで下した日本チームは、準決勝で本大会優勝チームとなる中国と対戦。１－３で敗れ、３位となりました。

個人戦では、男子シングルスで田中佑汰と谷垣佑真がベスト 8、横谷晟がベスト 16、男子ダブルスで谷垣佑真・濵田一輝ペアが銀メダル（決勝：谷垣・濵田 ３－４ 中国ペア)、混合ダブルスで木村香純選手と組んだ横谷晟がベスト８の成績を収めました。

団体銅メダルの日本男子チーム

全日本吹奏楽コンクールに 45 回目の出場

聴衆を魅了したサマーコンサート

高校吹奏楽部は 10 月 22 日、名古屋国際会議場センチュリーホールで開催された第 71 回全日本吹奏楽コンクール高校の部に東海支部代表として出場し、銀賞を受賞しました。

高校部門全国最多の 45 回目の出場を果たした同部は、顧問の伊藤宏樹教諭の指揮で、課題曲「ポロネーズとアリア～吹奏楽のために～」、自由曲「交響詩『モンタニャールの詩』」を見事に奏でました。

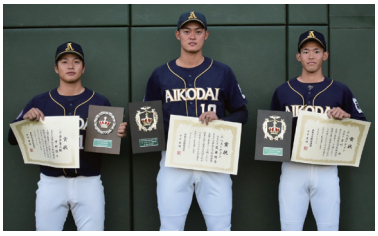
同部は10月14日に長野市で開かれた第37回東海マーチングコンテストでも朝日新聞社賞を受賞し、11 月 19 日に大阪城ホールで開かれる第 36 回全日本マーチングコンテストに出場します。10 月 1 日に浜松市のアクトシティ浜松で開催された第 66 回中部日本吹奏楽コンクール本大会では、金賞、文部科学大臣賞 (第 1 位) を受賞し、浜松市長賞を全審査員満点で獲得しました。

一方、同部恒例のサマーコンサートは 7 月 16 日に日進市民会館、同 21 日に名古屋国際会議場センチュリーホールで、それぞれ開かれました。今年度の全日本吹奏楽コンクール課題曲であるマーチ「ペガサスの夢」で開幕後、部員たちは顧問の伊藤宏樹・遠山翔大両教諭の指揮で「交響詩『モンタニャールの詩』」などを華やかに披露しました。

現在、部員は約 200 人。部活動は 23 種の係に全員が組織され、部員の手による運営を自主的に展開しながら、年間約 60 回のコンサートや地域貢献活動に精力的に取り組んでいます。サマーコンサート後半では、1 年生部員が演出や大道具政策を手掛けた夏の名曲の数々や、ダンスで彩る ABBA メドレーなどが続き、会場の吹奏楽ファンを大いに沸かせました。

愛知大学野球連盟新人戦で５年ぶりに優勝

大学硬式野球部は 6 月 24 日、本学グラウンドで行われた愛知大学野球連盟 2023 年度新人戦の決勝で中京大学を３－０で下し、2018 年以来５年ぶりとなる新人戦優勝を飾りました。



中村優斗（左）、尾藤祐介（中）、宮川怜（右）の各選手

また、同部は春季リーグ戦で３年生の中村優斗投手が最多奪三振の活躍をしたほか、4 年生の尾藤祐介(指名打者）と３年生の宮川怜（外野手）が、それぞれベストナインに選ばれました。

新人戦で５年ぶりの優勝を飾った硬式野球部

中島桐生、第 52 回中部学生ゴルフ選手権競技で２位

2023 年度（第 52 回）中部学生ゴルフ選手権競技が 8 月 9 ～ 10 日、岐阜県の明智ゴルフ倶楽部明智ゴルフ場（東コース）で行われ、大学ゴルフ部の中島桐生（3 年）が単独２位（準優勝）の成績を収めました。同選手権は、ゴルフ部が所属する中部学生ゴルフ連盟の上位組織である中部ゴルフ連盟が主催する競技であり、中部学生ゴルフ連盟が本年度開催した競技で上位成績を収めた 88 人の選手に出場権が与えられています。

中島選手は、初日 71（35、36）でラウンドし、9 位タイの成績で決勝ラウンドに臨みました。決勝ラウンドは、朝から強い日差しが照りつけ、同時に強い風が吹き前日よりコンデションが悪く、各選手スコアメイクに苦しむ中、この日のベストスコア 71（35、36）をマークし単独２位の成績を収めました。

入賞インタビューで、「1 年次は中部学生に出場できず、去年も思うような成績を残せませんでしたが、学内に練習設備があること、さなげ CC でキャディーをしたりラウンドさせてもらえたりと環境が良く、コツコツと練習を続けてきたことがこの成績につながりました」答えています。本格的にゴルフを始めて 6 年目であり、伸びしろは大きく今後の活躍が期待されます。

４年ぶりにホームマッチ開催

2023 年度前期日本卓球リーグ滋賀大会（６月 21 ～ 25 日・滋賀県彦根市プロシードアリーナ HIKONE）の一環として６月３日、「クローバー歯科カスピッズ」チーム（前年度リーグ前期４位）を八草キャンパス小体育館卓球場に迎え、同リーグ戦のホームマッチが行われました。コロナ禍を挟んで４年ぶりのホームマッチ開催とあって、会場には多くの卓球ファンが観戦に訪れました。試合後の交流会では卓球台を挟んで選手たちと和やかに交流しました。

交流会に参加した観戦者と選手ら

クラブ表彰

学園は７～ 10 月にかけ、全国大会に出場の各クラブに対してクラブ表彰を行いました。後藤泰之理事長が激励し、愛名会や高校同窓会、高校ＰＴＡからもお祝いが贈られました。

◎令和５年度全国高等学校総合体育大会出場
卓球部、フェンシング部、相撲部、ウェイトリフティング部、陸上競技部（以上、７月 18 日表彰）
水泳競技部（10 月 17 日表彰）

【７月 18 日の表彰】
▼高校ボウリング部
JOC ジュニアオリンピックカップ第４７回全日本高校選手権大会
▼高校将棋部
第 47 回全国高等学校総合文化祭将棋部門
▼中学フェンシング部
第９回全国中学生フェンシング選手権大会
【８月２日の表彰】
▼高校野球部
第 105 回全国高校野球選手権記念大会
【９月 14 日の表彰】
▼大学ヨット部
第３１回全日本学生女子ヨット選手権大会
【10 月 17 日の表彰】
▼高校チアリーディング部
Japan Cup 2023 チアリーディング日本選手権大会
▼高校メカニカルアーツ部
WRO 2023 Japan 決勝大会 in Tokyo
▼高校ダンス部
第 16 回日本高校ダンス部選手権ビッグクラス・スモールクラス
▼高校吹奏楽部
全日本吹奏楽コンクール
▼中学卓球部
第 54 回全国中学校卓球大会

８月２日の表彰（高校野球部）

発行　名古屋電気学園愛名会